

寸言

株式会社放電精密加工研究所
代表取締役社長

工藤 紀雄



航空機エンジン部品製造が会社を変えた

(株)放電精密加工研究所は、社名の放電加工による金属精密加工がコア技術の企業です。名古屋市の工場で三菱重工業(株)名古屋誘導推進システム製作所（以下、名誘）様の主に航空宇宙エンジン部品に関わり始めたのが40年前のこと。その後は、耐熱・耐食・耐磨耗コーティングやP/W社コーティングなど関わりが少しずつ増えた。

H19年に最初のNadcap認証を取得時の苦労は今でも忘れられない。当社のものづくりや品質管理レベルにはハードルは極めて高く、チームリーダーだった私は、お客様に認証取得の辞退を申し入れるほどだった。指導を頂く人には「貴方の会社は、茹で蛙状態ですね！」と言われるほど技能に頼る生産と検査主体の品質管理だった。それでも「会社の質を上げていくために挑戦すべき」とのご指導もあり挑戦を続けた。「無謀だ」と言われながらTrent1000エンジンの溶射にも挑戦した。V2500、PW4000などへの関わりを模索したが、どれ一つ大きく利益貢献できなかった。

そんな折一つの転機が来た。いつものように名誘様の資材へ日参していた時、新しいエンジンで機械加工先を探しているとの情報をつかむ。当社は放電加工がメインで機械加工は外注頼りで全く不得意な工程。担当資材課長に「他の工程はどうするのですか？」と尋ねたら海外方針と聞き「ならばそれをやらせてください」と全く根拠無きままにお願いした。幸いコーティングや放電加工の特殊工程に少しだけ優位があり、また会社全体が多事

業を広く展開し自律経営ができていることが評価され話は急展開していった。しかし、この事業を経営陣にどう理解させ、高額投資を決断させるか？とてつもない大きな壁におち当たった。土地探し、工場建設、設備導入、生産技術の確立、品質確保、利益確保など全てが不足。その時、大いに力を発揮し今に導いたのが現事業担当取締役の安藤であり、ものづくりを指導した奥村である。この二人がいなかったら当社の航空機エンジン部品事業は無く、また名誘様からも感謝しきれないほどのご指導と支援を賜った。何とか経営陣の理解は得たがその後の壁も大きく、多くのNadcap認証取得、山積みされた英文指示書の読解と書類の作成、審査対応、タクトタイムを考慮したラインでの製品品質の作りこみと、次々と難題が発生した。素材支給から部品完成する一貫生産の確立は、検討開始からおおよそ10年の歳月を要した。

その後、「無謀」と言われながらも挑戦した溶射の実績が端緒となって新たなアイテムも獲得できた。

放電加工の受託加工屋が外部からの信頼を得られ、多くの事業展開ができているのは、航空機エンジン部品製造へ挑戦し、技能から技術に変えたものづくりや検査からQMS維持の重要性を実感し、他の事業にも展開できていることによるものと感じている。決して楽な道ではなかったが、「企業の質向上」を続けていく為には継続すべき事業であり、日本の航空宇宙産業の発展に微力ながら貢献していく所存です。